

いうが、日本のは大部遅れていたように思う。

除隊後、十八年四月再召集を受けたが、なんとか生きのび、終戦後苦勞して、昭和二十二年に帰国することが出来た。

思い返すと、私は三度死にそこなつた。人生観は「人間万事塞翁が馬」である。戦争に参加した者は誰もが生死の境をさまよつて、生きて現在あることを切実に感謝していることであろう。

## 満州では軽機射手

### 再奉公は軍属で終戦

石川県 惣田 甚郎

―惣田さんは、体格ががっしりしているから現役でしよう。第九師団でしようから、満州ですか。

私は十三年徴集ですから、十四年の現役です。その時もう、満州の独立守備隊の歩兵だといわれ、広島に集合させられ、十四年十二月宇品港を出港しました。

部隊は、昔、渤海国の帝都だったという牡丹江省寧安県東京城というところにあった。奈良時代には「人」も貢物として送られたというし、浦島太郎の伝説もありました。日本人が昔からたくさん行っていて、交流があったという。おそらくコロ島あたりか、錦州方面から行ったのではないですか。

私は、独立守備・独歩第二十大隊第四中隊に入隊したのです。一個大隊は四個中隊編成で、各中隊ごとに分屯していて、第四中隊は東京城で、城内はかなり大きいまちでした。

そこで一期の教育を受け、教育がおわると各特業の教育をやる。大隊は歩兵ばかりではなく山砲、工兵、騎兵あらゆる兵種を持っていて、なんでもやれるよう二期の教育を受ける。私は歩兵の軽機関銃の射手で、最後まで特業なし、軽機関銃専門でした。

満州国が建国してからは平和だったが教育は厳しかったです、軍記は厳正でした。

―独立守備隊の独歩大隊というのは、どういう任務を持っているのですか。

独歩の大隊長は、現役の大佐で大隊長といっても連隊に準じていた。その任務は治安の維持、鉄道警備、列車の警乗と匪賊討伐でした。私は大隊一番の軽機関銃の名射手といわれていたので各隊から引っぱりだこで、どんな討伐にも必ず参加していました。だから、いつも危ない目にあっていたわけです。

匪賊とは金、陳、崔などという頭目で、牡丹江省、吉林省の方面にいた共産軍が主力だった。情報がはいると討伐隊を編成して出動しました。兵力は二個小隊で一個中隊編成でした。一個小隊は四個分隊編成でした。

討伐行動は状況にもよるが、中国人や韓国人の部落へ泊まったり、天幕露営で匪団と遭遇する時もあり、あわずに帰る場合もあった。定期的には、春とか秋に討伐行きもあり、戦闘も何回もある。満軍や警察大隊の討伐もあるが、それ等は行くと抵抗もあるが、独立守備隊にあって逃げることが多い。匪賊はソ連製の兵器を使っているもの（おそらく共産軍）もあり、在来の満州のものもあった。

― 惣田さんは戦闘で負傷したと聞きましたが、そのと

きの状況はどんなでしたか。

昭和十五年の春でした。金、陳、崔合同軍との戦闘があった。三方の山に敵がいるというので第四中隊が行った。最初、歩哨が密偵（一種のスパイ）を捕まえて、それに誘導させたら、七百人ぐらいの匪賊がいた。そこへ一個小隊の討伐隊がはいった（従来は二個小隊で行くのだが、その日は四種混合の予防注射のため参加せず）。

三方からかこまれ、重機関銃が正面に出たが全滅してしまつた。大部分の兵隊が戦死したり負傷をおつた。

敵の抵抗が強かったので、右からうかいする隊を編成した。軽機関銃一、擲弾筒一で一個分隊だった。上田伍長がうかいして、主力の突破口をつくつたので、匪団はくずれた。

そのとき、私が軽機の射手として出た。右からうかい、側面から攻撃したので、匪賊は逃げ足となつたのです。しかし、その時私は右上腕部に貫通銃創を受けたのです。

戦闘も止んで後方へさがり、牡丹江の病院に入院しました。（今も創跡があると患部をみせる）筋肉の機能障害

で湯岡子の病院へ転送、そこで一か月治療して、原隊へ復帰しました。

—その後はどうでした。傷は大丈夫ですか。

退院後は忙しかったです。初年兵の教育助手をしたり、衛兵教育をした。その後も、列車の警乗が毎日、下番の休みなし。その間にも討伐隊で出勤。勤務が多いので少ない兵力で戦闘しなければならなかった。

内務班でも軍紀はきびしかったが、私的制裁をしたことが大隊長の耳にはいり、中隊長が謹慎させられたこともあった。なぐった二年兵は宮倉（簡易拘留所みたいな牢屋）をくった。私はその仲間にはいらなかった。

それから、満州国の水力発電所の分遣隊や列車警乗、トンネル巡察、警戒、夜襲でも戦果をあげたりして、その功績が認められたか、初年兵では大隊のトップになった。第二次支那事変論功行賞で二人だけ勲八等白色桐葉章をいただくことができた。他に功績があった人も多かったが、皆、勲労ということで瑞宝章（殊勲が金鷄勲章、勲功が旭日、桐葉は勲八等の旭日章）である。そして昭和十七年七月、富山の歩兵第三十五連隊で除隊とな

りました。これが軍人としての経歴です。

—貴方は、再度満州に渡って、軍属として、終戦をむかえ、ご苦労されたそうですが。

昭和十七年七月に除隊したのち、家業に従事するかたわら、青年学校指導員として軍事教練の指導に勤めておりました。

昭和十八年春早くでしたが、満州の関東防衛経理部奉天出張所から遺骨率領でこられた郷里出身の陸軍属官が、経理部奉天出張所（満州第六九三部隊）の人手不足を説明して、赴任するようにすすめられたのです。

その後、満州にいくことを決心して、二月十八日、満州第六百九十三部隊事務雇員として赴任しました。

—その部隊というのは、どんな仕事をしているところなのですか。

この部隊は、満州国の東北部全域の日本軍の兵舎や官舎、宿舍の建設と借上げ、維持、管理、軍需品の調達等の仕事を主とする部隊でした。

私は採用された当時、庶務課の借上宿舍係として、先任者と二人で仕事をしていました。その後、電報、電話、暗

号、軍事機密の係長としてのかたわらの経理部長室室長も兼ねておりました。経理部長が出張の折は、駅までの送迎、出張先への手配、連絡、来客の配慮等も行っていました。

二十年八月九日、暗号書類受領のため、鄭家屯の関東軍経理部へ出張中、ソ連参戦、ソ満国境侵入を知らされました。

急遽部隊へ帰り、ソ連との一戦にそなえて事務整理をしました。奉天各部隊の婦女子は内地送還を目的として奉天駅より一個列車にのせ釜山へ向けて出発させた。

―満州はソ連参戦、現地民の暴動化、終戦で、テンヤワンヤだったと思いますが、関東軍の経理部も家族や職員をかかえて大変だったでしょう。

八月十五日は終戦の大詔がくだり、八月十八日、部隊が解散となり、現地採用した庶務課の女事務員の家に一時避難、宿泊させてもらうことにしました。

一方、釜山へ向けて出発した家族一行の列車は、三八度線まで停車させられ、平壤まで帰され、そこで金や貴金属品は皆没収されて、難民生活にはいっていました。

その連絡を受けた奉天の元各部隊の有志一同で救済団をつくり、資金をカンパして平壤などへ送ることになりました。

その金の輸送に私と工務課の新谷君が選抜され、三万円をかくし持って、すでに日本人旅行禁止中を支那服を着て、車中は日本語を話さず安東へと向かった。

途中、鶏冠山駅で中共軍将校の尋問を受け、スパイ嫌疑で鶏冠山駐屯地部隊に送られ(元日本人小学校)、三階の一室に入れられた。ここで一生の終わりかと思つたが、翌日取調べも終わり、その翌日ぶじ釈放され安東に到着。安東の救済団(駐在員)と合流して、救済の打合せ、送金の段取りをはかったが、あの鴨緑江が渡れず、朝鮮への入国が不可能なため、朝鮮の人を使って平壤へ救済金を送った。その折、使いの者が帰るまで、家族を人質として預かっていたが、無事返信と領収書を持って帰って来た。

その後も、奉天より数回金を送ったが、一回も安東に金が到着しなかったです。そのうち、使者の一人が尊い犠牲者となったこともあります。日本人救済のはなと

散ったわけです。

—その後、救済団の人々はどうなりましたか、満鮮国境も、三十八度線を越えることも大変なことでしょうから。

平壤の難民が六月、おじ三十八度線を通過して南鮮にはいつて情報を受け、我々安東駐在の救済員一同七人は、二期の豪雨を利用し、深夜安東を出発、徒歩で奉天に向かいました。

途中、二組の日本人引揚団体が、暴民に持ち物を取られているのを助けながら歩きつづけ、重慶軍と八路軍が対峙している第一線を突破して安平に到着しました。安平駅には何十とも知れない引揚団体が持ち物を全部取られ、空のリュックサックを背負って列車を待っていました。

私達団体は一物も取られず、無事安平から奉天へ向かうことになりました。

二十一年七月、奉天のまちに平和がもどったというけれど、街頭に家財や衣類の売店が並び、食うための必死の取引がおこなわれている。

一方、大和小学校、富士小学校では国境の町から、そうしてハルビン、チチハル等の各地から引き揚げてきた難民が、衣類は取られ、甚だしい人は南京袋（ドンコロス）から首と手を出して来た人達など、まるで乞食のような生活をしていました。土地の人でも家を追われた人々もたくさんいた。広い運動場も一メートル間隔くらいに墓標が立ち並び、頭の下がる思いでした。

部隊にいた女事務員達も、ソ連軍のくるのを恐れて頭は丸刈りです。終戦前は口紅をつけていた子らが、顔に墨を塗って、黒物の支那服を着ていた。面会に行ったが、恥ずかしかったのか、会うのを避けるようになっていた。大変気の毒な思いをしました。今さらながら戦争の恐ろしさがつくづく身にしみ、二度と戦争があってはならないと、心に強く感じました。

奉天の居留民会に連絡を取って内地への船便を待つて、十月初旬、病院船の付添い人としてコロ島を出港し、佐世保上陸で帰郷しました。